

終章

「……なるほど、ね」

そう呟くと、道成寺刑事は手帳をぱたりと閉じた。そして、遠い目で病室の窓の外を見やる。今日は綺麗に晴れていて、こくりの市立病院からは、海がよく窺えた。

伊吹はベッドに横たわったまま、静かに俯いていた。

あの夏祭りの日からもう、三日が過ぎていた。今日になるまで面会謝絶、絶対安静と医者に言われたため、伊吹はずっと、病院のベッドで寝ていたのである。といっても、身体のどこかに傷があったわけではなく、ひたすらに疲れ果てていたためであった。やっと身体を起こす気になったのが昨日で、今日も軽い見舞い以外はお断り、という状態だった。

三日の間ずっと、色々なことを考えていた。

「吉野くんはもう帰らない、か。じゃあもう……捜索は打ち切るように伝えておくね」

「……ああ」

伊吹はそつと言う。

もう、思いはとうに断ち切れているつもりだった。今微かに胸が痛むのは、きつと、残り香のようなものなのだろう。そのうち消える、気持ちの残滓に違いない。

「その……道成寺、刑事」

「やだなー。もうそんな縁遠い仲じゃないでしょうに。恵ちゃんでもいいわよ恵ちゃんです」

「……恵、さん」

伊吹は少し口元に照れ笑いを浮かべながら、そう言った。

「あの、よ……吉野が怪しいと気づいたのは、やはりあの冷房の件だったのか？」

「えー？ 全然。わたしそんな鋭くないもの。推理力ないし。尾津野さんに言われて初めて気づいて、すぐく納得した。そうじゃなくて、普通に事情聴取の時の態度を見て疑問に感じて、それで町で聞き込みをしたら、渡

邊教授と一緒に彼が喋っているところを見かけた人が見つかっただけよ。彼は口では、教授とそんなに親しくないかのように話していたから、おかしいなと思ってる」

警察の捜査って、そんなものよ、と道成寺刑事は肩をすくめた。まあ、そういうものなのだろうな、と伊吹も思う。

「彼も、家庭で色んなことがあったらしいけど……でも、彼のことをお父さんに連絡したら、赴任先から顔真つ青にして飛んで帰ってこられたわよ。吉野くん自身がどう受け止めていたかが問題だから、誰が正しいとは言えないけれど……だけど人間って、そう捨てたもんでもないとわたしは思う。そうあっさり鬼になったら、もったいないよ」

そう微笑んで、刑事は言った。今は伊吹も、そう思える。

——あの時は、夢の中のようなだった。

伊吹は下を向いて、口元に笑みを浮かべた。

続けて道成寺刑事は、真剣な面持ちになった。

「それに、まだ彼が犯人と確定した訳じゃないから。十中八九は間違いないと思うけど、でもまだ、根拠は推測と彼の言葉しかない。単なる彼の狂言である可能性も残されているからね。ここから先は、わたしたちの仕事。きちんと最後までやりきるから」

「うん……」

伊吹は頷いた。

あの後伊吹とすうくんを見つけてくれたのは、実は道成寺刑事だった。

大鬼の目前で、すうくんと一緒にいた伊吹だったが、一気に押し寄せた疲れにあらがえず、その場で気を失ってしまったようだった。その後の記憶がない。一方で、道成寺刑事は祭りの後、伊吹のことを心配し、警官を呼び寄せて町中を捜索してくれたらしい。

そして、夜半を過ぎた頃、例の金網の扉の前で、ほとんど裸で肩を抱き合い、血に塗れて倒れている伊吹と、それから、幼い姿に戻ったすうくんの姿を、道成寺刑事が発見したのだった。そのまま二人は、救急車で病院に搬送され、今に至る。

「……彼のこと、残念だったね」

道成寺刑事は、そうぼつりと言った。伊吹は、顔を上げる。

「大丈夫？ 辛い？」

「それは……」

伊吹は視線を逸らし、応えを考えた。

「辛いと言え、嘘だ。まだ、どう整理していいのか分からない。でも……」

伊吹は吉野の、最後の姿を思い起こす。

結局最後まで、伊吹は吉野のことを分けることが出来ないままだった。

いや、そればかりではない。受け止めることすら出来ないままだったのだ。

あのまま彼の元へ近付き、彼と寄り添ったところで——きっと自分は、いつまでも彼の心を捉えきることが出来ないままだっただろう。

今では、そう思う。

「……大丈夫だ」

「そう。それなら、よかった」

優しい声で、道成寺刑事は応え、小さく頷いた。

そして伊吹は、もう一つ大切なことを尋ねる。

「それから……あの、鬼のことは……」

「それは、わたしにも分からない」

刑事は間を空けず、そう応えた。

「ごめんね。実はわたしも、あなたとすうくんが大変な目にあったあの山の現場には、まだ入れていないの。また『偉い人たち』が色々検討してるみたいで。さすがにそのうち何らかの形で情報は入ってくると思うから、そのときは必ずあなたに伝える。でもまだどうなるかは、全く見えてない」

「鬼の死骸は……」

「残っていたみたいね。すでに発見されている、と思うわ。さすがに隠蔽するのが難しいレベルだから、どう処理するかは恐らく未定。不便なものねー。マンガとかだったら、退治したらシュワって光の粒になって消えたりするんだけど。全然だもん。ふふふ。夏場だから、早めに撤去しないと大変だと思うんだけどね」

「……マンガは、読んだことがないな」

「えー！ 一冊も？ そりゃよくないよ」

「うん。しかしこれからは、読むと思う」

伊吹は言った。

「でも……鬼の件についても、これからが一番大変になってくるんだろうね。隠しきれぬかどうかは、わたしにはまるで分からないけど、かといって鬼も、放っておいていなくなる訳じゃないだろうし。今後の対策は正直、見当も付かないな。警察に出来るのは、熊に見せかけた注意喚起ぐらい」「社もなくなってしまう。森や海や、この隠野の近辺に、どれぐらいの鬼がいるかはもう分からない。そこは……いろんな人に相談して、考えるほかないのだろう」

伊吹の脳裏には曾祖母を初め、様々な顔が浮かぶ。しかし誰よりも、一番このことを何とかしなければならぬのは、自分だ。間違いない。それは、認めなければならぬ。けれど。

それに正面から向き合うだけの気持ちは、すでに出来た。もう、理屈や言い訳には逃げない。自分は一人の人間でしかないけれど、でもきつと、何とか出来る。

伊吹はそう思った。

それから刑事は腕時計を見ると、さてと、そろそろ時間だね、と伊吹に向かって言った。

「また後日詳しく話を聞くことになるかと思うけど、よろしくね。これからのことは、これから考えればいいんだから。思い詰めず、お互い楽しく、幸せに生きていきましょ。じゃ、後がつかえているから、わたしはこれで。またね……伊吹ちゃん」

そう言って、道成寺刑事は足取り軽く、病室から出て行った。ゆつくりと、ドアが閉まる。

「後がつかえている……?」

伊吹は厭な予感と共に、呟いた。
すると――。

「お姉ちゃああああん！ 大丈夫――!?」

「いぶちやああん!!!」

「いぶき姉ええええええ!!!」

この上なくやかましい三人、紅葉、紺、みわを筆頭にして、他にも澄哉、

ほたる、さらには匠雄和尚に紀乃、おまけに祐理名さんに宇治川までが、部屋へと押し寄せてきた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、心配やったんやからー！」

「いぶちゃああああん！ ああ会いたかったわああああ！」

「あーはいはい。うるさいな全く……」

入って来るなり駆け寄ってきて、両脇から抱きついてくる妹と友人に面倒くさげに応対しながらも、伊吹はふと、匠雄を見た。

彼の腕の中には――病院着姿のすうくんが抱かれていた。

すうくんは嬉しそうに笑みを浮かべると、伊吹に手を振った。

伊吹は、微笑んだ。

*

見舞客の相手も終わり、全員が看護師に強制退去を命じられて、ようやく伊吹は一息吐く。何だかもう、早くも疲れてしまった。

しかし、十六にもなって屈強な看護師に引きずり出されていく紅葉と紺は、少し面白かったな、と思って、伊吹はくすりと笑った。

そうして、眠ろうとする。

そのとき。

ベッド脇の電話が鳴った。

「……はい」

『尾津野さんですか？ ナースステーションです。実は外電が入りまして。

どうしてもお繋ぎするように、というお話だったんですが、よろしかったでしょうか？』

「電話？ 誰なのだ？」

『お父様、だそうです』

伊吹は沈黙した。

一瞬、窓の外の景色を見やる。

海の上の空を、海鳥が数羽、悠々と飛んでいた。

伊吹は、しばらく考える。

「……分かった。繋いでくれ」

少しの間待つ。
やがて、久しぶりに耳にする低い声が、受話器の向こうから聞こえてきた。

『伊吹か？』

「……ああ」

『よく知らんが、何か大変だったらしいな』

「……誰に聞いた？ どうやって、この番号を知った？」

『そんなことしか言うことがないのか。相変わらずだな』

父は無遠慮に、そう言い放った。

伊吹は一瞬、歯を食いしばる。

頭に、血が上る。

しかし――。

すぐにふっと息を吐くと、伊吹は話を続けた。

「まあいい。電話、ありがとう。嬉しいよ」

『……どうしたんだ？』

今度は、父の方が動揺した様子だった。珍しく、その声に惑いがあった。

『お前らしくもない』

「そうかな」

伊吹は少し首を傾げて、言った。すると、父は続けた。

『ああそうだな。さっきのは訂正だ。あまり、相変わらずではない』

大まじめに父は言う。伊吹は思わず、ふっと吹き出した。

『……なんだ？』

「い、いや。何でもない」

懸命に笑いを堪えて、伊吹は言った。

『……今は、隠野にいるらしいな』

「ん？……ああ」

『いいところだ。お前の母さんと出会った』

「……うん」

『だが、お前のいるべき場所ではないだろう。お前には、やるべきことがある。学ぶべきものがある。そのうち、迎えに行くぞ』

一方的に父は告げた。

伊吹はまた少しの間、その言葉を考えていた。

それから、こう応えた。

「分かった。待っているよ」

『……』

「紅葉も会いたがっている。いつでもいいから、来ればいい」

伊吹は言った。

父はしばらく、黙りこくっていた。

海鳥の啼く声が聞こえる。

『……分かった。では、身体を休めて、しっかり養生しなさい。切るぞ』

「あ、ちょっと待って」

伊吹は思い出して、父に言った。

『なんだ』

「その……人類学や民俗学を学ぶ上で重要な文献を教えて欲しい。入門書からでもいいし、そちらの大学で使っているものでもよいのだが」

また少し、間が開いた。

伊吹は受話器を耳に当て、じっと、父の言葉を待っていた。

『……分かった。後で文献表を寺宛に送る』

「メールでいい。家に帰ってから、研究室のアドレス宛に送るから」

『……分かった。では』

そう言って、電話は切れた。

受話器を持ったまま、伊吹はベッドの背にもたれ、ぼんやりとどこか遠い場所を眺めていた。

少しだけ、楽しい気持ちになれた。